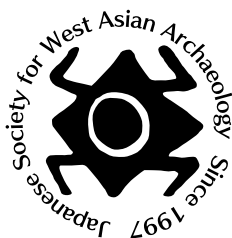


平成22年度
考古学が語る古代オリエント
Ancient Orient Revealed through Excavations in 2010

第18回西アジア発掘調査報告会報告集

Proceedings of the 18th Annual Meeting of Excavations in West Asia



日本西アジア考古学会

Japanese Society for West Asian Archaeology

平成22年度 考古学が語る古代オリエント

Ancient Orient Revealed through Excavations in 2010

第18回 西アジア発掘調査報告会報告集 目次

第18回西アジア発掘調査報告会の開催にあたって2
藤井 純夫

<エジプトの調査>

古代エジプト中王国・新王国時代の埋葬習慣の解明に向けてーダハシュール北遺跡第19次調査(2010年)ー8
吉村 作治、矢澤 健
Toward an Understanding of the Burial Customs during the Old and Middle Kingdom in Ancient Egypt: Excavation at Dahshur North, 19th season, 2010
YOSHIMURA, Sakuji / YAZAWA, Ken

失われた岩窟墓を求めてーエジプト、アル=コーカ遺跡第4次調査(2010-11年)ー13
近藤 二郎
Looking for the Lost Tomb: The Fourth Season of the Work at al-Khokha in the Theban Necropolis (2010-11)
KONDO, Jiro

ローマ人が利用した要衝としての神殿ーエジプト西方砂漠ハルガオアシス、アル・ザヤーン神殿遺跡の調査(2010年)ー16
中野 智章、田澤 恵子、古川 桂、亀井 宏行
El-Zayyan Project in Kharga Oasis 2010
NAKANO, Tomoaki / TAZAWA, Keiko / KOGAWA, Katsura / KAMEI, Hiroyuki

王朝衰退期の都市ーエジプト・アコリス遺跡の調査2010ー22
川西 宏幸、辻村 純代
AKORIS Project 2010
KAWANISHI, Hiroyuki / TSUJIMURA, Sumiyo

<西アジア先史時代の調査>

新石器時代の巨大集落ーシリア、テル・エル・ケルク遺跡の2010年度調査ー30
常木 晃
Excavations at Tell el-Kerkh 2010, Syria
TSUNEKI, Akira

北メソポタミア農耕村落の起源ーシリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡第11次発掘調査(2010年)ー35
西秋 良宏
Excavations of Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur, Syria: The 2010 Season
NISHIAKI, Yoshihiro

新石器時代ヨルダンの移牧拠点とダムーワディ・グウェイール17、106号遺跡の緊急発掘調査(2010年夏)ー40
藤井 純夫、足立 拓朗、長屋 憲慶
An Agro-pastoral Outpost and a Barrage System in Neolithic Jordan: Rescue Excavations at Wadi Quweir 17 and 106
FUJII, Sumio / ADACHI, Takuro / NAGAYA, Kazuyoshi

アラビア海沿岸先史海洋民族文化の研究ーオマーン、ラス・ジブス貝塚および周辺沿岸域第5次調査(2010年)ー46
津村 宏臣、樋泉 岳二
Prehistory of Maritime People along the Arabian Sea Coast Area, Ras Jibsh Shell Midden, OMAN
TSUMURA, Hiroomi / TOIZUMI Takeji

南コーカサス地方の新石器時代ーギョイテペ遺跡の第3次発掘調査(2010年)ー53
門脇 誠二、ファルハド・キリエフ、久米 正吾、下釜 和也、赤司 千恵、西秋 良宏
The Neolithisation of the Southern Caucasus: The 2010 Excavations at Göytepe, the Republic of Azerbaijan
KADOWAKI, Seiji / GULIEV, Farhad / KUME, Shogo / SHIMOGAMA, Kazuya / AKASHI, Chie / NISHIAKI, Yoshihiro

<西アジア歴史時代の調査>

農耕と牧畜のはざまに ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落ーシリア、ビシュリ山系テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の2010年度発掘調査ー62
長谷川敦章、飯塚 守人、大沼 克彦
Excavations at Tell Ghanem al-Ali 2010, the Jabal Bishri, Syria
HASEGAWA, Atsunori / IIZUKA, Morito / OHNUMA, Katsuhiko

第18回西アジア発掘調査報告会報告集

Proceedings of the 18th Annual Meeting of Excavations in West Asia

CONTENTS

ユーフラテス川流域の古代墓を探る—シリア、ビシュリ山系ガーネム・アル・アリ遺跡近郊墓域の第5次調査（2010年）— 68

久米 正吾、小野 勇、赤司 千恵、大沼 克彦

Investigating EBA Mortuary Practices on the Euphrates: The 2010 Season at the Cemeteries near Tell Ghanem al-'Ali, the Jabal Bishri, Syria
KUME, Shogo / ONO, Isamu / AKASHI, Chie / OHNUMA, Katsuhiko

ユーフラテス河中流域の青銅器時代—シリア、ビシュリ山系第4次調査（2010年）— 75

西秋 良宏、門脇 誠二、仲田 大人、下釜 和也、早川 裕式

Early Bronze Age Sites on the Middle Euphrates: the Fourth Season's Survey (2010)
NISHIAKI, Yoshihiro / KADOWAKI, Seiji / NAKATA, Hiroto / SHIMOGAMA, Kazuya / HAYAKAWA, Yuichi

シリア、ビシュリ山系の遊牧化過程—ワディ・アル・ハッジャーネ1号遺跡の発掘調査（2010年春）— 81

藤井 純夫、足立 拓朗

Process of Pastoral Nomadization in the Bishri Mountains, Central Syria: Excavation at Wadi al-Hajana 1 (March-April, 2010)
FUJII, Sumio / ADACHI, Takuro

アッシリア帝国の拠点遺跡—シリア、テル・タバンの遺跡の第10次発掘調査（2010年）— 87

沼本 宏俊

Excavations at Tell Taban, Syria (2010)
NUMOTO, Hirotoshi

ヒッタイト文化の起源を探る—トルコ共和国カイセリ県一般調査（KAYAP）、第3次調査（2010年）— 94

紺谷 亮一、クトゥル・エムレ、フィクリ・クラックオウル、須藤 寛史、早川 裕式、山口 雄治

Investigating the Origins of Hittite: Archaeological Survey in Kayseri, Turkey (KAYAP 2010)
KONTANI, Ryoichi / EMRE, Kutlu / KULAKOĞLU, Fikri / SUDO, Hiroshi / HAYAKAWA, Yuichi / YAMAGUCHI, Yuji

3,000年の居住史を探る—イスラエル、テル・レヘシュ遺跡2010年（第6次）発掘調査— 100

桑原 久男、月本 昭男

Exploring the Occupation History of 3,000 Years: Excavation at Tel Rekhesh, Israel (2010)
KUWABARA, Hisao / TSUKIMOTO, Akio

イスラエル、アラム、ゲシュル王国の始まり—2010年度エン・ゲヴ遺跡（イスラエル）発掘調査報告— 105

杉本 智俊、間舎 裕生

Beginning of the Kingdoms of Israel, Aram Damascus, and Geshur: Preliminary Report of the Excavations at Tel 'En Gev, Israel, 2010
SUGIMOTO, David T. / KANSHA, Hiroo

パルミラの葬制の解明—シリア・パルミラ北墓地129-b号墓の調査2010— 110

西藤 清秀、中橋 孝博、濱崎 一志、石川 慎治、佐藤 亜聖、佐々木玉季

Elucidation of Palmyra Funeral Practices: Excavation of No.129-b House Tomb at the North Necropolis in Palmyra, Syria 2010
SAITO, Kiyohide / NAKAHASHI, Takahiro / HAMAZAKI, Kazushi / ISHIKAWA, Shinji / SATO, Asei / SASAKI, Tamaki

ヨルダン、ウム・カイス（ガダラ）の発掘調査と分布調査2010— 116

松本 健

The Excavation at Umm Qais and General Survey in the Surrounding Area of Umm Qais
MATSUMOTO, Ken

墓主リュースの肖像壁画とPan神のマスク—レバノン共和国、ブルジュ・アル・シャマリ地区壁画地下墓の修復—2010年度— 123

西山 要一、片山 一道、鈴木 孝仁、パトリツィア・ロ・サルド、ハッサン・バダウィ、ガビー・マアマリ、ナーデル・シクラウィ

Excavate the Portrait of "ATCIC" and the Mask of "Pan-God": The Restoration Project of Wall Painting Tomb in Lebanon, 2010
NISHIYAMA, Yoichi / KATAYAMA, Kazumichi / SUZUKI, Takahito / Lo SALDO, Patorizia / BADAWI, Hussan / MAAMALY, Gaby / SEKLAWI, Nader

フェニキア・ヘレニズム～ローマ時代の墓制の研究—レバノン、ラマリ遺跡ローマ時代地下墓TJ10の発掘調査2010— 130

泉 拓良、辻村 純代、前野 弘志

Study on the Funerary Practice in Hellenistic and Roman Phoenicia: Excavation of the Roman Hypogeum TJ10 at Tyre in Lebanon, 2010
IZUMI, Takuro / TSUJIMURA, Sumiyo / MAENO, Hiroshi

オマーン湾の港町を掘る—アラブ首長国連邦ディバ遺跡第4次調査（2010年）— 136

佐々木達夫、佐々木花江

Excavations at the Port Town in the Musandam Peninsula
SASAKI, Tatsuo / SASAKI, Hanae

南コーカサス地方の新石器時代 — ギョイテペ遺跡の第3次発掘調査（2010年） —

The Neolithisation of the Southern Caucasus: The 2010 Excavations at Göytepe, the Republic of Azerbaijan

門脇 誠二
KADOWAKI, Seiji

名古屋大学博物館助教
Assistant Professor, Nagoya University Museum

ファルハド・キリエフ
GULIEV, Farhad

国立科学アカデミー考古民族学研究所考古民族学博物館館長
Director, Museum of Archaeology and Ethnology, The Institute of Archaeology and Ethnography of National Academy of Sciences

久米 正吾
KUME, Shogo

国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員
Co-operative Research Fellow, The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University

下釜 和也
SHIMOGAMA, Kazuya

古代オリエント博物館共同研究員
Co-operative Research Fellow, Ancient Orient Museum

赤司 千恵
AKASHI, Chie

早稲田大学博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC
Doctoral Student, Waseda University, JSPS Research Fellow DC

西秋 良宏
NISHIAKI, Yoshihiro

東京大学総合研究博物館教授
Professor, The University Museum, The University of Tokyo

1. はじめに

南コーカサス地方の新石器時代を研究することには、少なくとも2つの意義がある。1つは、南東アナトリアで始まったと現在考えられている農耕牧畜経済が北方の地域へ拡散した過程に関する考古学的証拠を提供することである。もう1つは、農耕牧畜経済の発達に伴う人々の生活や活動、文化全般の変化—いわゆる「新石器化」—の過程が南コーカサスの地で具体的にどのように起こったのかを明らかにすることである。この2つを研究目的として掲げることによって、南コーカサスの新石器時代は単なる地域史の一部ではなく、西アジア考古学が抱える大きな研究課題の1つに資す

るフィールドとして役立てることができる。と考え、私たちはアゼルバイジャン共和国で考古学調査を進めている。

日本隊以外ではフランス隊やドイツ隊がアゼルバイジャンやグルジア、アルメニアにおいて新石器時代遺跡の調査を最近進めている（西秋ほか2009）。しかしながら、当地における農耕牧畜の起源を探る研究は、最近になって始まったわけではない。唯物史観に基づくソビエト考古学の下、1930年代頃から進められていたのである。1960年代には、クラ川中流域に分布する新石器時代のテル型遺跡が数多く調査された。その成果に基づいて1980年代には、当地最古級の本格的初期農耕牧畜民が残したシュラヴェリ・シヨム文化が研究者のあい

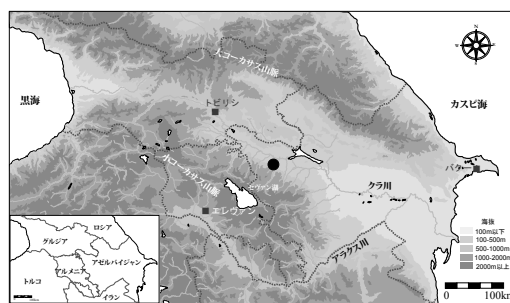


図1 南コーカサス地方の地図とギョイテペ遺跡の位置

だで認識されるに至った。南コーカサスの考古学研究には、新石器時代を単なる年代や物質文化で定義するのではなく、その当時の人々の生業活動や社会構造にアプローチする姿勢が根づいている。その姿勢は、シリアやトルコ、ヨルダンにおいて現在行われている数多くの新石器時代遺跡の調査と方向性が類似するといえるだろう。

日本隊の調査は、アゼルバイジャン国立科学アカデミー考古民族学研究所のファルハド・キリエフらと共同で行っており、当国西部に位置するギョイテペ遺跡（直径140m、周囲の地表面からの高さ8m）の発掘を中心に進めている（図1）。もともとこのテル型遺跡は、ソビエト時代にI. ナリマノフによって初めて調査が行われ、1980年代に初期農耕村落遺跡として報告された（Narimanov 1987, 1992）。その再調査として2007年にアゼルバイジャン隊とフランス隊が共同でテルの測量を行った。翌年にアゼルバイジャン隊が発掘調査を開始し、その時に日本隊の数名が予備調査として初めて現地を訪れた。そして2009年には日本隊も発掘調査を開始した。それまでの調査経緯が今年の報告会で発表された（西秋・キリエフ 2010）。

本報告は、筆者らがギョイテペ遺跡で2010年8月中旬に行った第3次調査につい

てである。日本隊が滞在したのは3週間弱であるが、アゼルバイジャン隊はその前後の期間を含めて数カ月におよぶ発掘調査を行った。ここでは、日本隊が滞在した期間に行われた調査の内容について報告する。

2. 2010年の調査

ギョイテペ遺跡の発掘調査は2008年に始まったばかりである。当面の調査目的は、1) 新石器時代の居住層の全容を明らかにし、その年代づけを行うこと、および2) 物質文化や生業活動、居住行動に関する証拠を得ることである。この目的の下、遺跡の発掘と層序の調査だけでなく、植物遺存体の分析や遺跡周辺の地形調査も行ってきた。

これまでの調査としては、第1次発掘でアゼルバイジャン隊が頂丘部に近い2B区（10m×10m）を掘り下げた（図2）。2009年には、2B区に隣接しテルの頂上にさらに近い2A、1A、1B区がアゼルバイジャン隊によって発掘された。その結果、約20m×20mの範囲が地表下約2mまで掘り下げられ、たくさんの泥レンガ製円形建築遺構が検出された。それだけでなく、幾つかの円形建築物が中庭を囲みながら袖壁で連結される特徴的な配置も確認することができた。この発掘区で日本隊は遺構の層序点検を行い、結果として5つの建築レベルが設定された。この他、日本隊はギョイテペにおける新石器時代の居住層がどこまで深く連続するのかを調べるため、テル裾野部に近い4B区の東半分（4BII）の発掘を行い。その結果7つの建築レベルを仮に認定した。

この成果を踏まえ、2010年の調査は3A区と3B区の発掘を主に行い、テル頂上部と裾野部で2009年に検出された層序をつな

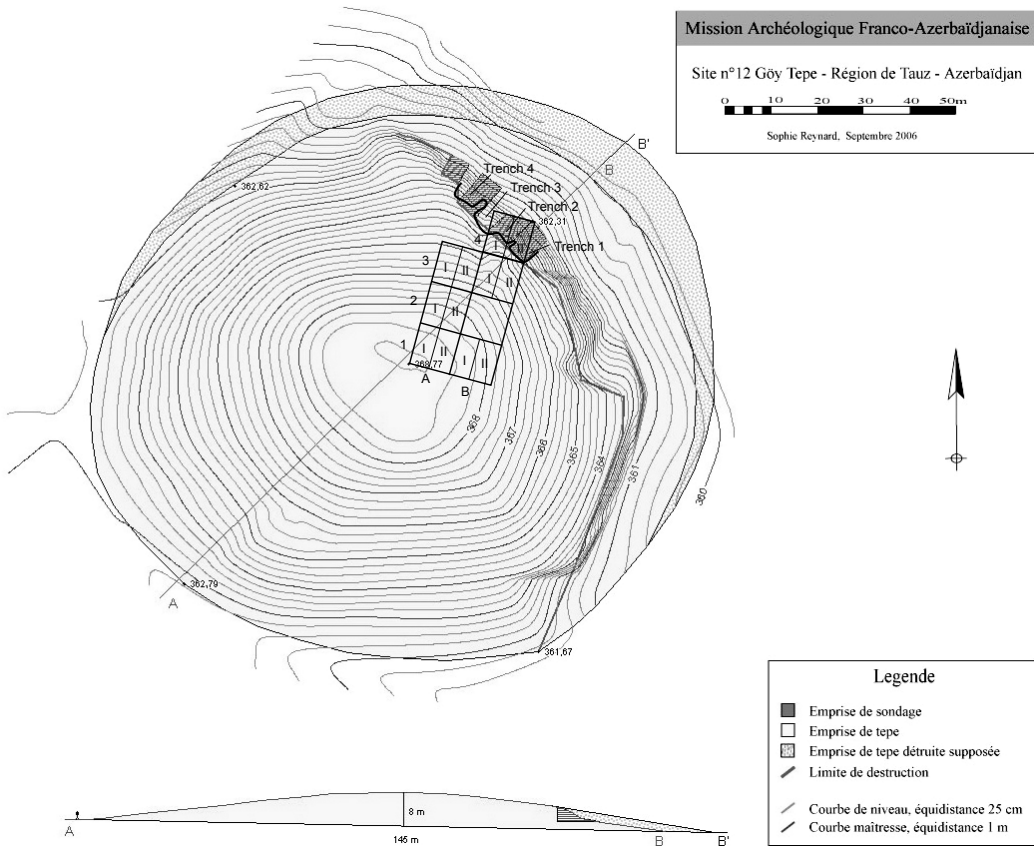


図 2 ギョイトペ遺跡の平面図と発掘区（原図は B. リヨネ氏による）

げること主要な目的とした（図 2）。3 A 区の発掘を進めたのはアゼルバイジャン隊である。10m×10mの区画を東西に二分し、そのあいだに土層観察用の帯を残しながら発掘が行われた。その東隣の 3 B 区の西側半分（3 B I、5 m×10m）の発掘を日本隊が担当した。日本隊はそれに加え、テル裾野部（4 B I と 4 B II 区）の発掘も継続し、昨年設定した層序の再点検を行うと共に、より古い時期の新石器時代居住層の検出に努めた。また、植物遺存体の回収も昨年に続いて行った。その成果の概要について次に述べる。

3. 発掘調査

（1）建築レベルの設定

まず、2010年の発掘調査における最大の成果は、テル頂上部の発掘区（1 A、1 B、2 A、2 B）と裾野部（4 B II 区）においてそれぞれ別に設定されていた建築レベルを層位的につなげることができたことである。結果として、約7.5mの堆積に13の建築レベルが同定された。この建築レベルは、限られた発掘面積で露出した建築物や層序に基づいた暫定モデルであり、調査の進展に伴ってレベルの数が多少変更される可能性もある。

こうした前提に基づいて、レベル 1（最

上) からレベル12のあいだの幾つかの層から13個の放射性炭素同位体の年代値が得られている。どの較正年代も紀元前6千年紀の範囲に収まり、これまで検出された建築レベルがすべて新石器時代であることが示されている。興味深いことに、どのレベルの年代値も、可能性の幅が紀元前6千年紀の半ば200年のあいだに集中している。これは、レベル1から12が最大でも200年以下のあいだに形成された可能性が十分あるということを示す。

いずれにしても、テルの最下層にはまだ達していない。テルの高さは周囲の地表面から8mであるが、実際はテルの裾が埋もれている可能性も十分ある。ギョイテペでは、これまで頂丘から約7.5m下の堆積までを調査したが、あともう少しでテルの最下層に達するのか、それとも新石器時代の居住層がさらに続くのか、あるいは新石器時代より古い堆積が存在するのかを突き止めるのが来年度以降の課題である。

(2) 円形建築物の調査

第1次、2次に続き、第3次の発掘調査でも幾つかの泥レンガ壁円形遺構が発見された。この遺構はシュラヴェリ・ショム文化に特徴的な建築形態であり、メソポタミア地方のハラフ文化の遺跡で見られるトロスに一見類似する。両文化の年代が一部重複するのが示唆的であるが、両者の建築には違いも存在する。例えば、シュラヴェリ・ショム文化の遺跡には矩形の建築物がほとんど伴わず、円形建築物が袖壁で連なる配置が特徴である。

シュラヴェリ・ショム文化の円形建築に見られるサイズの変異が機能の違いを示すのではないかという指摘が早くからされている。例えば、ショムテペを発掘したナリ

マノフは、最大で直径3.7mの大型グループは住居であり、直径2mを超えない小型グループは貯蔵庫など付随的な家屋だろうと述べている (Narimanov 1992:12)。

しかしながら、建築物の機能を考古学的に証明するのは容易な作業ではない。というのも、新石器時代以降の住民はしばしば床掃除を行い、作業の痕跡を消してしまうからである。メソポタミアやレヴァント地方の地中海性気候帯に分布する初期農耕村落遺跡の場合、活動内容を示すような遺物が床面に大量に残されている例は、焼失家屋を除けばほとんどないといってよい。

ところが、ギョイテペの場合、何らかの活動で使用された道具や、その結果生じた廃物が活動場にそのまま残されているような状況が散見される。例えば第2次調査では、磨石が石皿の上に置かれたまま、製粉作業の途中で残されたような状態が発見された。また、大型の石刃や骨角器、あるいは完形に接合復元できる土器片の集中部が円形遺構に近い屋外から検出されたりしている。大型の廃物は日常の生活場から離れたところに除去されるのが考古遺跡や民族誌では通例であるが、ギョイテペ居住民の場合、廃物の除去活動がやや緩やかなようである。

第3次の発掘では、このような見解をさらに補強する証拠が3B I区で発見された。そこで発見された円形遺構の壁は南部分のみ残存していたが、およそ直径5m位だったと推測される。床面の中央付近に敷石炉が設置され、その周囲に骨角器や石器、動物骨、大型の土器片が集中して分布していたのである (図3)。動物骨には肩甲骨や長骨など大型の骨が多く含まれており、それを素材として骨角器の製作が行われていた可能性も想起されるが、それを証

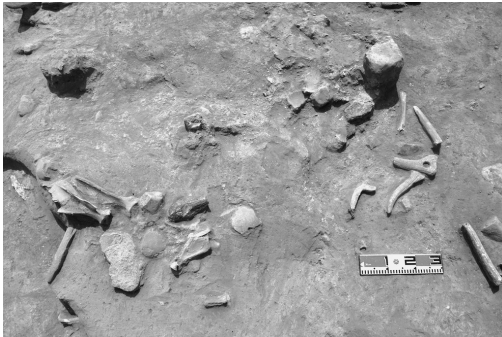


図3 円形遺構の床面上に残されていた骨角器、石器、動物骨、土器片の集中（3 B I 区）



図4 入り口が確認された円形遺構(写真右)と泥レンガの集積(写真左)(4 B I 区)

明するには遺物の分析が必要である。

円形遺構に関するもう1つの発見は入り口である。ギョイテペの円形遺構は、壁の残りがよく1 m位に達する場合も少なくないが、これまで明確に入り口が検出された例はほとんどなかった。2010年の発掘では、4 B I 区の南東隅付近に2つの建築レベルにわたって直径2 mほどの円形遺構が検出されたが、下のレベルに属する円形遺構の壁の北部分でレンガが途切れている部分が認められた(図4)。

(3) 貯蔵施設と石弾・土弾

シュラヴェリ・シヨム文化の遺跡では円形遺構が袖壁によって連結する配置が特徴的あることは述べたが、袖壁で屋外の空間を仕切るには何か意味があったかもしれない。その証拠に、ギョイテペでも屋外にたくさんの遺構や遺物が残されており、そこで様々な活動が行われていたようである。

2010年に発見された屋外の遺構として目立ったのは、貯蔵施設である。テル裾野部4 B II 区の北西部において、5つの円形貯蔵施設(直径50-60cm)が密着して設置されており、その近辺にさらに2つの小型

の貯蔵施設が隣接していた(図5)。口縁まで残っている貯蔵施設の壁の高さは約50 cmであった。これと類似した遺構はシュラヴェリ・シヨム文化の他の遺跡でも報告されており、ギョイテペでもテル頂上部の発掘区で幾つか発見されている。しかし、この遺構が地上式か地下式かこれまで不明確であった。今回の調査によって発見された貯蔵施設の内2つが円形建築物の壁に密接して構築されており、建築壁の基礎とレベルと比べることができた。その結果、貯蔵施設の下部が円形建築物の壁底よりも下に位置していたことが分かったため、貯蔵施設は半地下式であった可能性が高い。

問題はこの貯蔵施設に何が入っていたかということである。まず、埋土に自然石がランダムに混入する例や、泥レンガが積まれている例がある。これらは、容器施設が廃棄された後、その空隙を埋めるための詰め物であろう。その他の容器では、大型の骨角器や磨石が入っていた(図6)。これらは、欠損品の廃棄物かあるいは一時的に保管された道具がそのまま放棄された結果であろう。

食料が貯蔵された可能性も考えられる。しかし残念ながら、炭化穀物粒が底に集中



図5 小型円形貯蔵施設の集中部(写真右)
(4 B II区)

していた状況はどの貯蔵施設にも発見されなかった。ただし、埋土から土壌標本を計画的に採取し、水洗選別を行って炭化物を回収した。その分析が現在進行中である。特例として、白い繊維状の物質が容器の底に4 cmほどの厚さで堆積していた貯蔵施設があった。その直上に完形の磨石2つが置かれていた。この白い繊維状物質は、ギョイテペの円形遺構内の床付近や屋外で薄い層状に堆積しているのが随所で確認されている。この物質は何らかの植物遺存体であると推測されるが、それを確実に同定することによって、屋内外の場の利用や貯蔵施設の機能に関する証拠が得られると期待している。

屋外におけるこの他の発見物として注目されるのは、土弾や石弾の集中部である。この種の遺物もシュラヴェリ・シヨム文化の遺跡から頻繁に報告されているが、その機能についてはよく分かっていない。2010年のギョイテペの発掘では4 B I区において、土弾や石弾が混在した集中部が、円形建築壁の外側に隣接して発見された。これは、土弾と石弾が少なくとも同様な機能を有していたことを示す証拠となるであろう。さらに、4 B I区と同じ建築レベルにおいて、たくさんの泥レンガが集積した遺



図6 貯蔵施設に残されていた骨角器
(4 B II区)

構が屋外に発見された(図4)。建材置き場かもしれない。

4. 植物遺存体の研究

ギョイテペ遺跡では自然遺物が良好に残存している。動物骨の回収は通常の発掘作業でも行うことができるが、植物遺存体の回収には計画的な土壌サンプリングが必要である。ギョイテペでは屋内外の活動場と思われる場所や炉、貯蔵施設の堆積を選択的にサンプリングすると共に、その付近の堆積も比較標本として回収している。2010年は3 A II、3 B I、4 B I、4 B IIの発掘区から36サンプル(計115リットル)の堆積を採取した。現地で水洗選別を行った結果、多くのサンプルから裸性オオムギの粒と穂軸が検出された。

5. まとめと展望

2010年の調査で得た大きな成果は、約7.5 mの堆積に対する建築レベルを仮設できたことであろう。このモデルは今後の発掘で検証していく必要があるが、当面はギョイテペにおける新石器時代の居住史を明らかにすると共に、物質文化や生活の通時的変化をたどる枠組みとして有効であると思われる。その材料となる人工遺物と自然遺物

の回収も計画的に行っている。

南コーカサスにおける新石器化のプロセスと特徴を明らかにするという目標の達成に向けて調査はまだ開始されたばかりであるが、検討に値する課題が得られている。1つは、ギョイテペにおける裸性オオムギとコムギの卓越である。これらの種類はムギ栽培の起源地と考えられているトルコやシリアの初期農耕遺跡における出土は少ない。これらの地域から農耕が南コーカサスへ波及したならば、なぜ起源地で少ない種類が波及先で卓越するのかの説明されなければならない。もう1つは、ギョイテペにおける居住の特徴である。約7.5mの堆積が最大でも200年足らずで残されたという予察が得られているが、堆積速度が速いという印象を受ける。テルの堆積速度は、泥壁住居の建築と廃棄のサイクルの速度にも関わる問題である。さらに、ギョイテペでは活動場に残された遺物が多く、廃物除去が比較的緩やかであるという観察結果を考慮すると、居住民の移動性という問題が検討に値すると考えている。この検討に資する良質なデータを回収・分析することが今後の課題である。

なお、日本隊の調査は平和中島財団国際学術研究助成金（代表：西秋）と高梨学術奨励基金助成金、日本学術振興会特別研究員奨励費の交付を受けて実施した。

参考文献

- ・西秋良宏・門脇誠二・有松 唯（2009）「トランスコーカサス地方新石器時代研究の現状と課題—シュラヴェリ・シヨム文化を中心に」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』23：1-25。
- ・西秋良宏、ファルハド・キリエフ（2010）「南コーカサス地方の新石器時代—ギョイテペ遺跡の発掘（2009年）—」『第17回西アジア発掘調査報告会報告集』62-67頁 日本西アジア考古学会。
- ・Guliev, F. (2010) "The 2008-2009 excavations of Göytepe, Azerbaijan." Paper presented at *International workshop on The Neolithic of the South Caucasus: Insight from the Excavations at Göytepe, Azerbaijan*. The University of Tokyo, 26 March 2010.
- ・Guliev, F., F. Gusejnov, H. Almamedov and N. Hacizade (2009) "Göytəpə Neolit dövrü yaasıyş məskəmində aparılan arxeoloji qazıntılar." *Azərbaycanda Arxeoloji Tədqiqatlar 2008*: 17-20.
- ・Guliev, F., F. Gusejnov and H. Almamedov (2009) "Excavations of a Neolithic settlement at Göytepe (Azerbaijan)." In *Proceedings of the International Symposium Baku: Azerbaijan. Land between East and West, April 1-3, 2009*, pp. 29-30.
- ・Guliyev, F. and Y. Nishiaki (2010) "New light on the south Caucasian Neolithic: Insights from Göytepe, Azerbaijan." Paper presented at *7th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, London, U.K., 12-16 April 2010.
- ・Guliyev, F., Y. Nishiaki, F. Fuseinov, S. Kadowaki, K. Tanno, Y., Hayakawa, N. Hacizade, T. Babayeva, S. Kume, K. Shimogama, Y. Arimatsu, and C. Akashi (2010) "Excavations of a Neolithic settlement at Goytepe." *Archaeological Researches in Azerbaijan, 2009*: 45-54. (本文アゼルバイジャン語、英語要旨付)。
- ・Narimanov, I. G. (1987) *The Culture of the Most Ancient Faming and Stock-breeding Population of Azerbaijan*. The Academy of Sciences, Azerbaijan. (ロシア語)。
- ・Narimanov, I. G. (1992) "The earliest agricultural settlements in the territory of Azerbaïdžhan." In Kohl, P. L. (ed.), *Recent Discoveries in Transcaucasia*, 9-66. *Soviet Anthropology and Archeology* 30(4). M. E. Sharpe, N.Y. (Narimanov 1987: pp. 14-69の英訳)
- ・Kadowaki, S. (2010) "The Japanese excavations at Göytepe, 2009." Paper presented at *International Workshop on The Neolithic of the South Caucasus: Insight from the excavations at Göytepe, Azerbaijan*. The University of Tokyo, 26 March 2010.

第18回西アジア発掘調査報告会実行委員会

石田恵子（実行委員長）、足立拓朗、安倍雅史、門脇誠二、須藤寛史、
田尾誠敏、津本英利、津村眞輝子、西本真一、三宅裕、宮下佐江子

平成22年度 **考古学が語る古代オリエント**
第18回西アジア発掘調査報告会報告集

発行日 2011年3月26日

発行 日本西アジア考古学会

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目1117

東海大学文学部歴史学科 考古学第3研究室（近藤研究室）内

TEL 0463-58-1211（内線3103） FAX 0463-50-2195

jswaa@hum.u-tokai.ac.jp <http://www.hum.u-tokai.ac.jp/~jswaa/>

制作 土師印刷工芸株式会社
